



Data

監督: 蜷川実花
 脚本: 早船歌江子
 出演: 小栗旬/宮沢りえ/沢尻エリカ/二階堂ふみ/稲垣来泉/山谷花純/片山友希/宮下かな子/山本浩司/檀蜜/木下隆行/近藤芳正/成田凌/千葉雄大/瀬戸康司/高良健吾/藤原竜也

👁️👁️ みどころ

『人間失格』を映画化すれば暗くてみじめなだけだが、人間・太宰治を映画化すれば面白い。しかも、そこに正妻と2人の愛人を絡め、ラストは現実に行方不明の心で締めくくれば！そう考えた(?) 蜷川実花監督は、彼女特有の色彩美の中で、世界的ベストセラー誕生の裏側にあった「死ぬほどの恋」——ヤバすぎる実話をスクリーン上に！

無頼派作家・檀一雄の登場がないのは寂しいが、坂口安吾や三島由紀夫と対比しながら、太宰の文学的位置づけを確認したい。その上で、酒と女にかけてはハチャメチャで、血を吐きながら『人間失格』を完成させた人間・太宰治を、しっかり考えたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■小説『人間失格』ではなく、人間・太宰治をテーマに！■

本作のチラシには、「世界で最も売れている日本の小説」、「人間失格」。その小説より遙かにドラマチックだった《誕生秘話》を、世界屈指の写真家、蜷川実花が、構想に7年を費やし大胆に映画化！とある。しかし、太宰治の小説『人間失格』はホントに“世界で最も売れている日本の小説”なの？これは、一体何のデータに基づいた文章なの？そんな疑問もあるが、本作は小説『人間失格』ではなく人間・太宰治をテーマにした映画だ。

ちなみに、『蟹工船』(09年) (『シネマ23』未掲載) は人間・小林多喜二をテーマにしたものではなく、小説『蟹工船』を映画化したものだった。それに対して、『トルキン 旅のはじまり』は、『指輪物語』や『ホビットの冒険』を書いた英国の作家J・R・R・トルキンをテーマにした映画だった。また、『メアリーの絵で』(17年) (『シネマ43』148頁)

は、私が全く知らなかったイギリスの女流作家メアリー・シェリーをテーマにした映画だったし、『あなたはまだ帰ってこない』（17年）（『シネマ43』220頁）も私が全く知らなかったフランスの女流作家マルグリッド・デュラスをテーマにした興味深い映画だった。

私は太宰治の『人間失格』を中学3年生の時に、『走れメロス』や『斜陽』と共に読んだが、特別な感動は覚えなかったし、それが以降の人生観に大きな影響を与えることもなかった。それは、私が受験システムの中に組み込まれ、無感動な中学生として育てていたためかもしれないが、他方で『三国志』等は血湧き肉躍らせながら読んでいたから、あながちそうでもなかったはず。また、中学3年生の時は将棋にのめり込み、「将棋指しになる！」と父親を困らせていたほどだったから、あながち個性がなかったわけでもない。

そんな私にとって、小説『人間失格』が映画化されれば、そりゃ必見だが、それ以上に、人間・太宰治に焦点を当てた映画の方が興味深い。しかも、そのテーマが「太宰治と3人の女たち」ともなればなおさらだ。しかして、本作のキャッチコピーは「【禁断の恋】が世界的ベストセラーを生んだーヤバすぎる実話！」とされている。なるほど、こりゃ面白そう！こりゃ必見！

■太宰治は「敗北の文学」？vs 小林多喜二、宮本百合子■

私が学生運動に熱中していた1967年当時の日本共産党の“必読文献”とされていたのが、プロレタリア文学の最高峰に位置する小林多喜二の『蟹工船』等の他、宮本顕治と宮本百合子の往復書簡である『十二年の手紙』だった。しかし、私はそれ以上に宮本顕治の『敗北の文学』に興味を持った。これは作家・芥川龍之介を論じた論文で、宮本顕治が東大在学中の1929年に雑誌『改造』の懸賞論文に当選し、文壇デビューしたものだ。したがって、太宰治とは全く関係ないが、宮本顕治なら、芥川龍之介の影響を強く受けた作家・太宰治も太宰治の『人間失格』も、きっと「敗北の文学」と断定するはずだ。

作家・宮本百合子は富裕な家庭のお嬢様だったが、宮本顕治と結婚して共産党活動にのめり込み、プロレタリア文学を極めていった。太宰治（本名、津島修治）は青森県屈指の資産家だったが、青年期に入ると左翼運動に加担し、生家と重なる大地主やブルジョア階級を告発するような小説を発表したから、22歳で生家から義絶。以降、死ぬまで正式に義絶は解消されなかったようだ。しかし、彼は小林多喜二や宮本百合子のようにプロレタリア文学を目指すことはなかった。そして、1935年に26歳で文壇デビューしてから1945年の日本敗戦までの間、軍部とケンカすることもなく、『走れメロス』『富獄百景』『津軽』等を書いて有名作家の地位を確立させていった。

蜷川実花監督は本作で、作家として安定していたそんな時代の太宰治は描かず、彼が38歳の時、女性関係が最も激動した1947年を中心に描いていく。結果として、彼が1948年5月12日に『人間失格』を脱稿、6月1日に連載を開始、6月13日に富栄と玉川上水に入水、19日、遺体が発見されたのは客観的な事実だから、「【禁断の恋】が世

界的ベストセラーを生んだ一ヤバすぎる実話！」というキャッチコピーは少し大げさだが、レッキとした事実。しかして、太宰治の『人間失格』は芥川龍之介と同じように宮本顕治が言う「敗北の文学」？

■太宰治は無頼派？vs 檀一雄・坂口安吾・三島由紀夫■

作家太宰治は何度も自殺未遂を体験しているが、本作冒頭は銀座の女給・田部シメ子と七里ヶ浜海岸で囚った心中の姿が描かれる。これは1930年の出来事で、太宰21歳の時だが、なぜ彼はこれを含めて再三自殺未遂騒動を起こしたの？それは本人しかわからないが、本作はそれから15年後の1946年、つまり敗戦の翌年、太宰が人気作家として活躍している姿を描くところから物語をスタートさせていく。

作家があらゆる体験を書くためのネタにするのは当然だが、太宰の場合は酒と結核と女がネタづくりの基本。そして、それは同時に太宰を死に至らしめるためのネタでもあったから、バーに集まる編集者たちの話題は、酒、結核、女のどれが最後に太宰を殺すことになるかだったし、それを賭けていたから面白い。

“無頼派”として最も有名な作家は、“最後の無頼派”作家、文士と言われた檀一雄。私は彼の『夕日と拳銃』が大好きだが、自分自身をモデルにした遺作である『火宅の人』は、小説も映画も面白かった。また、彼の処女作品集の1つである『花筐』は、自身の若き日の青春群像劇で、小説も映画も面白かった（『シネマ41』67頁）。檀一雄は、太宰治とは盟友で、ネット情報によれば、2人が出会った1933年から召集で交流が途絶える1937年までの間は、連日のように連れ立っての放蕩三昧だったらしい。また、お互い酔いつぶれたあげく、太宰に自殺を持ちかけられ、共にガスを使って実行しかけたこともあるらしい。しかし、前述の通り、本作ではそんな時代の太宰治は描かれていないため、最も太宰とウマが合い、同じような“無頼派”として鳴らしていた檀一雄が登場しないのは、少し残念。それに代わって（？）、本作では、坂口安吾（藤原竜也）を太宰の同志として、三島由紀夫（高良健吾）を太宰を批判する若手作家として登場させているが、彼らは作家太宰治をいかにとらえ、太宰の小説をいかに評価していたの？それは本作を観てのお楽しみだが、私には少し違和感がある。

さらに、本作には、太宰に翻弄される編集者として佐倉潤一（成田凌）が登場するが、彼はどうも太宰治が嫌いなようだし、太宰の作品も好きではないらしい。しかし、編集者は、作家にゴマをすって作家を祭り上げながら作品を書いてもらうのが仕事。そのため、彼は自分の意見や仕事の不平不満を極力抑えながら太宰と付き合っていたが、ある日、それを爆発させることに……。それは一体なぜ？

本作中盤では、「作家・太宰治とその仲間たち」とも言うべき形で様々な人脈が語られるが、全般的に少し薄っぺらな印象がある。ひょっとして、それは蜷川実花監督が女性だから、“無頼派”としての男の生き方をあまり理解できていないためかも……？

■□■ 『斜陽』 は太田静子のパクリ？著作権騒動になれば？ ■□■

学生時代にマルクス、エンゲルス、レーニンの古典を勉強した人なら誰でも、女性革命家ローザ・ルクセンブルグのカッコいい生きザマ（と死にザマ）に憧れたはず。しかして、あの時代の“文学少女”で、自分自身でも創作に励んでいた太田静子（沢尻エリカ）が、ローザ・ルクセンブルグや恋、革命に憧れていたのは当然だ。

太宰と静子の接点は、静子を書いた日記風告白文を太宰に送ったことがきっかけ。終戦後に2人が再会する中で、太宰から「新しい小説を書くため、日記を見せて欲しい」と頼まれ、静子がそれに応じたことが『斜陽』誕生のきっかけになったというから、すごい。文士が集まるパーで、太宰が語る「人間は恋と革命のために生まれて来たのだ」のフレーズはカッコいいが、何とそれは静子からのパクリだったから、ビックリ。さらに、太宰の死後、太宰と作品に関する言動を一切慎むことという誓約書を取られていたのに、それに違反する形で静子を書いた『斜陽日記』によれば、“斜陽族”なる流行り言葉まで生んだ太宰のヒット小説・『斜陽』は、静子の回想的な日記からのパクリだ。もし、今のように著作権が厳格な時代に著作権騒動（裁判）が起きれば、きっと静子が勝訴していたはずだ。

平成、令和の時代のシングルマザーは何の負い目もないが、戦後すぐの昭和の時代の“未婚の母”は大変だったはず。しかし、太宰に「日記」を渡すため、太宰が神奈川県下曾我村にある静子の自宅を訪れ、そこで3日間泊まった時に妊娠したという逸話がスゴければ、三鷹に住む太宰を訪ねるも太宰の冷たい態度に傷つき、出産の相談ができないまま別れると、その日が太宰と会う最後となった話もカッコいい。さらに、1947年11月12日に女兒が誕生し、太宰を訪ねた弟から「治子」と名付けた認知証をもらったものの、太宰には一切頼らず、炊事婦や寮母として生計を立て、生涯「未婚の母」として生きたというのも、カッコいい。

ちなみに、『斜陽』は、恋と革命に生きようとする娘・かず子、最後の貴婦人の気品を保つ母、麻薬中毒で破滅してゆく弟・直治、そして、かず子が思いを寄せる流行作家・上原。敗戦直後の没落貴族の家庭を舞台に、滅びゆくものの哀しくも美しい姿を描いた長編小説だが、執筆中に静子の妊娠が発覚したことにより、内容が当初の構想から二転三転したという説もあるらしい。しかして、それはどの部分・・・？

■□■ 『ヴィヨンの妻』 のモデルは？ ■□■

私は、落語家・桂春団治（別名“ど阿呆春団治”（?））をテーマとし、岡千秋と都はるみがデュエットで歌った『浪花恋しぐれ』が大好きで、バブルの頃は北新地の店でさかんに歌っていた。同曲の1番は、岡千秋が歌う「芸のためなら女房も泣かす、それがどうした文句があるか」で始まり、2番は都はるみが「そばに私がついてなければ、何もできないこの人やから」と返す構造だが、私が特に好きなのは1番と2番の間に入るセリフ。さて、

それは・・・？宮沢りえは、今や日本を代表する本格的演技派女優に成長したが、『湯を沸かすほどの熱い愛』（16年）（『シネマ39』28頁）での3度目となる日本アカデミー賞最優秀主演女優賞受賞はお見事だった。そんな宮沢りえが、本作では太幸の正妻・津島美知子役を演じているので、それに注目！

その演技達者ぶりは相変わらずだが、太幸が1947年に発表した『ヴィヨンの妻』のモデルが美知子だったことは意外に知られていない。しかし、文士たちが集まるバーのシーンが多い本作では、そこでの伝聞話の一つとしてそんな話題が語られるので、しっかりそれに耳を傾け、改めて『ヴィヨンの妻』を読んでみたい。静子の『斜陽日記』はいかにも静子の才能（文才）をひけらかす感があるのに対し、美知子の『回想の太幸治』はいかにも控えめ。太幸のような男には美知子のような正妻が必要だったことがよくわかる。

宮沢りえは、『たそがれ清兵衛』（02年）で初の日本アカデミー賞最優秀主演女優賞を受賞したが、同作では、子供を持つ男やもめの清兵衛が言わば幼馴染の同級生であったうえ、宮沢りえ扮する朋江の兄貴が清兵衛を尊敬しており、清兵衛の良き理解者だったが、当然2人は「時代の制約」という絶対的なものに縛られていた。そのため、朋江の恋心は微妙だった。そんな状況下での恋愛模様を、清兵衛に扮する真田広之と宮沢りえは、まさに日本版、時代劇バージョンによる『ロミオとジュリエット』ばりに見事に演じたから、宮沢りえは同賞を受賞したわけだ（『シネマ2』68頁）。しかし、本作に見る美知子の夫・太幸は不誠実そのもの・・・？小説は書いても、酒と女にトコトンだらしく、結核のためいつもせき込み、時々血を吐く男だ。さあ、正妻・美知子は3人の子供の世話をしながら、そんな夫・太幸といかに接したの？それを本作でじっくりと・・・。

■□■山崎富栄はどんな女？二階堂ふみの演技は？■□■

「太幸の愛人で最後の女」になったのが、太幸と手と手をきつく赤いひもで結んで、共に玉川に入水心中した時に28歳だった山崎富栄（二階堂ふみ）。美容師として働いていた富栄が人気作家の太幸と知り合う本作のシークエンスは興味深いのが、そこで見るメガネ女の富栄はそれほど魅力的な女とは思えない。しかし、不道德な生活を送る太幸に対して、「人それぞれなんじゃない？」とクールに話す富栄は、当時としては珍しいキャラ。これは言わば、私たち団塊世代の1970年代における秋吉久美子のようなもの・・・？

富栄は未帰還の夫を待つ人妻だったが、自分が心から敬愛する太幸のためなら、「身も心も捧げる」と宣言し、ホントにその通り実行したから、すごい。折りしも、結核の病状が深刻になっている太幸にとって、そんな富栄の出現は何かと好都合だった。もっとも、不倫相手が自分だけではないことを知りつつも、静子が太幸の子供を産んだこと、その子供の名前に治の字を取って「治子」と名付けてやったことを知ると、さすがの富栄もおかんむり。そこで富栄は、「自分も太幸の子供が欲しい」と肉関係性をせがみ、「一緒にいてくれないければ死ぬ」と迫ってきたから、太幸は嬉しいような迷惑なような・・・？

富栄が子供を産んだら、「まだ本名の修があるサ」というのは、太宰らしい言い逃れだが、結核のため血を吐きながらの情事は、ホントは辛かったのでは・・・？また、太宰にとっての自殺はさまざまな体験の1つであり、心中もその変形のパターンだったのかもしれないが、何事も思いつめるタイプの富栄にとって、太宰との自殺(=心中)は、いつか必ず成し遂げるべき宿題だったらしい。そのため、佐倉から「書いてください！『人間失格』。先生にしか書けない、どこまでも罪深い小説を！」とハツパをかけられた太宰が、血を吐きながら「恥の多い生涯を送って来ました。」という告白から始まる『人間失格』を一気に書き上げると・・・。

私は、女優・二階堂ふみがデビューした『ガマの油』(09年)からずっと彼女に注目し、『ヒミズ』(12年)、『シネマ28』210頁、『ほとりの朔子』(13年)、『シネマ32』115頁、『私の男』(13年)、『シネマ33』62頁、『この国の空』(15年)、『シネマ36』26頁)等で絶賛してきたが、近時の彼女は残念ながらい作品に恵まれていない。そんな彼女にとって、本作は近時の不振(?)を振り払う絶好の役だが、さて、その演技は？

■□張芸謀監督が水墨画なら、蜷川実花監督はやはり赤！■□

スクリーン上に赤を基調とした色彩美をふんだんに使ったことで有名になったのが中国第五世代の旗手・張芸謀(チャン・イーモウ)監督。ノーベル文学賞作家・莫言(モー・イエ)の原作を映画化し、1988年第38回ベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞した『紅いコーリャン』(87年)の素晴らしさは、まさに出色だった(『シネマ5』72頁)。

彼の特徴は、その後のハリウッド進出を目指した『HERO』(02年)、『シネマ5』134頁)や『LOVERS』(04年)、『シネマ5』353頁)では大きく変化し、また、『王妃の紋章』(07年)、『シネマ34』90頁)では黄金色が際立っていたが、直近の『SHADOW 影武者』(19年)では水墨画に回帰している。これは、きっと彼も人生の一つの到達点に達したと考えたため・・・？チャン・イーモウ監督のような世界的な「色彩の魔術師」は珍しいが、日本の赤色をふんだんに使った色彩の魔術師が、蜷川実花監督だ。写真家でもある彼女の初監督作品『さくらん』(07年)は、ストーリー的にはイマイチだったが、評判通りの色彩美と華やかさは素晴らしかった(『シネマ18』203頁)。

赤を基調とした色彩美という蜷川監督の特徴は本作でも顕著で、随所で登場する花びらがいっぱい落ちてくる幻想的なシーンは美しい。入水すれば現実には冷たいだけだろうが、本作のスクリーンで見るような美しい花びらに囲まれるのなら、それだけで満足できるのかも・・・？太宰が富栄と玉川に入水する際そのように考えたのかどうかは知らないが、本作では人間・太宰治の生きざま、死にザマの検討とともに、蜷川監督が本作のモチーフとしてスクリーン上に展開する色彩美を、あわせて堪能したい。

2019(令和元)年9月23日記